
甘いお星様

幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘いお星様

【コード】

N3556I

【作者名】

幸

【あらすじ】

10年も会ってなかったお兄ちゃんとの切ない再会

夢を見た

小さい頃に一緒に遊んだお兄ちゃんの夢・お兄ちゃんは栗色の髪に眼鏡の奥から優しい瞳を覗かせていた・

私はその優しい目が好きでいつもお兄ちゃんに付きまどっていた・

何故お兄ちゃんの夢を見たのかわからない

あんな小さいときの記憶とおの昔に忘れたつもりだったのに

10年も前から会ってもいない人の事を夢にみるなんて
なんだか変な気分だった・

私はもう22歳でしつかり働いていた・

なんだか懐かしい変な夢を見たせい

か
頭が痛い

仕事になんか行く気もしないが私だってもう立派な社会人である

そんな程度の事でゴネて休むほどもう子供ではないのだ・

重たい腰をベットからあげてリビングへと向かった

私は母と2人暮らしで

父はあたしの小学生の時病気で死んだ

あまりその時の記憶はないが

母が言うには全くといっていいほど泣いていなかったらしいのだ

親が死んだというのに泣かない小学生とは　なんと可愛くないもの

なのだろうと改めて思った。

食パンにマーガリンを軽くぬり

私は新聞をよみながらさっさと口にほうばっていく

死亡

新聞を見ると毎回目に止まる言葉

たくさん並ぶ名前

わかってる

人が死なない日なんてないのだ

私は軽く支度を済ませ

玄関を出ようとした

「もう行くの？まだ6時30分よ」

母が眠たそうな目で階段からおりてきた

「仕事がたまってるの。早く終わらせたいのよね」

「そう…」

あたしが玄関を向くと母は急に思い出したかのように声をあげた

「そう…：そういえば、あなたの好きだった”お兄ちゃん”帰ってきたらしいわよ」

私は一瞬どきつとした

朝見た夢を少し思い出し

薄く深呼吸をした

「いってきます」

母の声など耳にはいらなかったかのように私は何も言わずにでていった。

お兄ちゃんのこと
だいすきだった

ただあの日の事だけがどうしても思い出せない

父の死んだ日

私はお兄ちゃんにつれられ夜部屋をぬけだした
覚えているのはそこまで

後はお兄ちゃんとバイバイした時にもらった
こんぺいとつと言葉…

電車の音で聞こえなかった言葉。

ぼーっとしながら車のエンジンを入れ仕事へと向かった。

午後10時
やっと帰宅

今日は課長にも怒られるし
仕事はなかなかすすまないしついてない
車の中でため息をついた
白い息が軽く広がって すぐに消えた

コンコン

窓ガラスを叩く音
栗色の髪 眼鏡
変わらない優しい目

” お兄ちゃん ”

車の外にあわてて出ると
あの時より大人な
お兄ちゃんが優しそうな顔で立っていた

「な…なにしてんの!？」
「おばさんから聞かなかった? ちょっと帰って来たんだ」

その言葉をはっした時少し疲れた顔をしてるように見えた
私はあえて何も聞かなかった
大人になった私には聞かれない事の一つや二つあることくらい
わかっていたからだ

「おかえりなさい」
「ただいま」

二人ともそう言って軽く笑った

そして並んで歩き始めた

「あつ 真ん丸お月様！」

私は空を指さして言った

「由香は変わってないな

前にも聞いた事あるよその言葉」

「そうなのっ？」

「あー 夜ぬけだした日にな

そんでその後星指さして言うんだよ・

俺泣けちゃって…」

そう言うとお兄ちゃんは星を優しく切ない目で見ていた

私の思い出せない記憶を持っていたのだ

「ねえ 私その時なんていったの??」

「… 由香覚えてないのか 小さかったもんね」

「うん。」

少し沈黙が続いた

私の足音とお兄ちゃんの足音

遠くから聞こえる車の音

とても優しい音だった

「お父さん…」

そうやって由香が言ったんだよ」

それから
私もお兄ちゃんも一言も喋らなかった
なんだか
せつなかつたから
お兄ちゃんの目もお星様もあたしの足音も

その夜あたしはねむれなかった
星が眩しくて
なんだか目をつむりたかった
でも なんだかできなかつた
小さい頃のあたしが何度もあたしに呼びかけてるようすで。

次の日の夜も
お兄ちゃんはおあたしの窓ガラスを軽く叩いた
優しい目で

「由香…
こんぺいとう覚えてる?」

「あたしに最後にくれた奴ねっ
そう…あの時なんて言ったの?」
お兄ちゃんは少し困った顔をして
星を見ていた

あたしはそれ以上何も聞けなかつた
聞きたくなかつた

普通のたわいもない話しをする以外何もなかった

「ねえ…由香」

深刻そうな顔で母によびとめられた
会社から帰って来たばかりだつて言うのにやけに重たそうな話し
をされそうのため息が出そうだった

「この前”お兄ちゃん”の話したでしょ帰って来たって…」
「知ってるよ。会ったもん」

母は少し驚いた顔をし
切なそうな顔をした

「そう。あんたならもっと落ち込むかと思ったけど…大丈夫なら…」

何を言ってるのかわからなくなった

何で私がお兄ちゃんが帰ってきて落ち込むのかわからない
ましてや

だいすきだったから喜ぶはずなのに

胸のざわめきが

「……………どゆつと？」

「お兄ちゃんね……………」

母が1番最後まで話す前に私は玄関を飛び出して走っていた

ヒールを履いていたのも忘れて

「痛っ……………」

ヒールが折れて川のほうにコロんと転がっていった

「由香？大丈夫？」

優しい声 大きな手

だいすきな瞳

「ねえっ

お兄ちゃんはまだもう私から離れない？

…嘘だよね。みんなが言ってる事なんて」

お兄ちゃんは黙っていた

黙ってあたしの口にこんぺいとうをいれた

「…由香

俺 由香に会いたかったんだ

由香お父さんの事お星様って言ったから忘れないって見ててくれる
っていったから」

お兄ちゃんの顔が暗くてよく見えなかった

声だけが

頭に響いていた

「こんぺいとうあげた時本当は何にもいってないんだ
言えなかった 好きなんて」

お兄ちゃんはあたしを好きだった
あたしもお兄ちゃんが好きだった

「お兄ちゃん…」

こんぺいとうって甘いお星様みたいだね」

そう言った時

あたしにはもうお兄ちゃんの足が見えなかった
涙が出そうだった

視界がぼやけて

お兄ちゃんが見えなかった

唇に柔らかい

甘い感触があって

微かな声だけが風のようにきこえた

「お星様になったんだ

由香をいつも見てるために」

目から一粒涙が落ちて

目を開けた時にはもうお兄ちゃんはいなかった

甘い香りと

夜空に光る星だけがそこにはあった

(後書き)

1120202020

2020

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3556i/>

甘いお星様

2010年12月30日07時19分発行